

使命と責任と信頼と

船長には、乗客や乗員の命を預かるという大きな責任があります。

このため、船の航行に当たっては安全を守ることは当然のことですが、不幸にも万が一遭難した場合などには、先ず乗客の安全を図り、次に乗員を脱出させ、しかる後に、船を離れる、若しくは船と運命を共にする。これが、私達が理解している船長の責任というものでしょう。

その責任の重さ故に、船長には大きな権限と共に、船員からはもとより、乗客からも信頼と名誉が与えられているのだと思います。

こうした責任と信頼の関係は、何も船長に限るものではありません。医者などの医療関係者はじめ、警察官や消防士、自衛官はもとより、福島第一原発で復旧に当たっている東電職員など官民にかかわらず様々な人々についていえることです。

如何なる仕事も、責任を果たすこと無しには信頼を得ることができません。

今回の東日本大震災においても、被災者の救助、被災地の復旧に向け、官民をあげて様々な方々が懸命の努力をされています。その中には、自らが被災者である方々も多数含まれています。まさに、与えられた役割と責任を果たそうという使命感そのものの姿であり、心から敬意を表したいと思います。

こうした中、先日、福島県から救助隊の要請を受けた消防庁が、静岡市と岐阜市の消防本部に患者搬送への協力を要請したところ、「事前準備もなく詳しい状況が分からない中、出動させることは不安」として、要請を断ったことが新聞に載っていました。

また、福島第一原発が被災した際、原子力安全保安院の検査官が約1週間同原発を離れていたことが判明し、これについて、同保安院では「食料をどう運ぶかという問題もある。組織的な後方支援体制が取れなかった」と説明

しているようです。

この他、被災地内の病院で医師が避難していて一部の看護師だけで入院患者を守っていた病院があった、ということなども明らかとなっています。

それぞれのケースについていえば、多分やむを得ない様々な事情があつてのことだろうと思います。いずれも命にかかわる厳しい環境の中で判断されたことですから、個別のことについて批判しようとは思いません。

ただ、静岡市や岐阜市の消防本部は、それぞれの地域における災害に際しても同じような行動を取るのだろうかとの疑問は残ります。また、原子力安全保安院のケースの場合、仮に遭難にあつた船長の立場であつたならどうしたのだろうかと考えてしまいます。

私は、幸いにも今回の被災地とは遠いところにおりますが、死と向かい合うような凄絶な状況下で作業に当たっている方々、危険を承知で被災者の救援に当たっている方々が多数いらっしゃるのを見ながら、こうした危機に際し、「如何に判断し行動すべきか」ということを、私自身がその覚悟と共に厳しく問われているのだと、強く感じています。 （塾頭 吉田 洋一）